

本年9月5日から8日まで東京において第10回海岸工学国際会議が開催される。この会議は、元来アメリカにあった波浪研究会(Wave Research)が主催し、開催国の組織委員会が会議の組織運営を行っていた。しかし昨年より波浪研究会が改組されて、海岸工学研究評議会(Coastal Engineering Research Council)となり、世界各国からの評議員50余名をもって組織され、事務局はアメリカ合衆国土木学会(ASCE)内におかれることとなった。そして改組後の第1回の国際会議が、以前からの申合せにより東京で開かれることとなったのである。われわれはこの会議を開催するに当り、わが国の土木学会、およびこの方面に関係の深い国際的団体である国際水理学会(International Association for Hydraulic Research)との共催とし、土木学会の海岸工学および水理学会両委員会を中心となって組織委員会を作り、準備をすすめている。

日本は海岸の土地利用が盛んで、また津波、高潮その他による海岸災害も多い。したがって、海岸工学に関する多くの問題を抱えていることは世界有数であり、これに関係する技術者、研究者の数も非常に多い。そのため国の内外を通じて今回の会議への関心もかなり高く、参加者数、発表論文数ともに従来のをはるかに越えることが確実な状態にある。最初は外国から人が集まるだろうかということなどを心配していたのが、現在では会議をいかにうまく運営し、数多い論文をいかに消化するかに苦慮するようになった。このようなことは、会議主催者の味わう苦勞であろう。

国際会議を日本で開くことの意義については、いろいろということができるであろう。たとえば、外国との知識交流を飛躍的に増大させること、日本の科学技術を国外に広く紹介して将来の技術輸出に貢献すること、または日本の若い研究者、技術者を国際的な環境と外国語に慣れさせることなどがまずあげられるであろう。

しかし現在の日本では、物ごとの評価があまりにも直

正会員 工博 東京大学教授、第10回海岸工学国際会議組織委員長

接的に行なわれており、特に経済的評価があまりにも優先しているのではなからうか。国際会議は正しく運営されるならば、以上のような貢献を別にしても、外国の人々との間の理解を深め、大きくいえば国際的な平和の道にもつながるものと思う。日本人は過去においてあまりにも閉鎖された環境におかれていたために、外国人の迷惑を過度に気にしていたことは事実であり、そのために、国際会議でも過度の接待が行なわれた例も多いように思われる。このようなことは国際会議の正しい運営とはいえないのであって、真の相互理解が国際会議の持つ重要な意義の一つであるとすれば、やたらに費用をかける会議ではなくて、日本の現状を理解してもらうことに重点を置いた会議にしたいものである。

アンドレ ジイドのソビエト紀行を読むと、その当時、つまり今から30年あまり前には、ソ連がいかに閉鎖的な状態にあったかがわかる。しかし、昨年われわれがレニングラードでの国際水理学会に出席し、さらにソ連の国内を旅行して見聞した所によると、今日ではソ連も盛んに国際会議を招致し、科学や文化の交流にきわめて熱心であるように見受けられる。これは単に世界的な流行に染まったとか、いろいろな物的な効果を考えたとかいうだけではなくて、人類の当然に進むべき方向に各国とも大勢としては進みつつあることを示しているものと思われる。われわれは、いろいろな国際会議が、国内の各種講演会と同様な気軽さで開かれるようになって貰いたいものと考えている。

以上にわれわれの意図する所を述べたが、現実はいかに節約しても、国際会議となればまだまだかなりの経費がかかり、参加費で費用をまかなえる状態からは遠いのが実状である。また、事務的にもいろいろと面倒なことが多い。このような点で、会議開催にいろいろと援助を戴いている各方面に深甚の謝意を表するとともに、今後は、日本でもあまり金をかけずに国際会議を開くことができるように努力したいと考えていることを申しそえたい。